立教観光学研究紀要　第19号　2017年3月
St. Paul's Annals of Tourism Research No.19 March'17
pp.73-74

修士論文要約

来訪者と集落住民の協働による「場所」の創出

―“「東京ひのはら村ゲストハウスへんぼり堂」をめぐる人々―

Emergence of "Place" by The Coproduction of Visitors and Community Residents:

―Around The "Tokyo Hinoharamura Guesthouse Henborido"―

藤原　香奈
FUJIWARA Kana

キーワード：観光，場所，農山村地域，ゲストハウス，協働
Keywords : Tourism, Place, Rural Area, Guesthouse, Coproduction

1．研究の背景と目的

近年，日本では農山村地域の振興に関する施策や取り組みが盛んに行われており，なかでも観光は，都市部から農山村地域へ人口を流動させる取り組みとして着目されている．

日本において，農山村地域が観光対象として扱われるようになった経緯には，社会的背景とそれにまつわる国家政策，国営事業が大きく関連している．たとえば，高度経済成長を背景としたレクリエーション需要の増加，日本国有鉄道が実施した「ディスカバー・ジャパン」による「ふるさと」としての観光対象化，グリーン・ツーリズムを代表とする政策を背景とした「交流」の商品化があげられる．

このように，観光対象としての農山村地域はレクリエーションの対象地からイメージとしての「ふるさと」，そして「交流」の場へと表象されてきた．一方，これらの表象は日本の社会的背景や国家政策に重点をあてて論じられているものであり，実際にその場所に訪れる多様な観光者が等閑視されていると考えられる．特に，モダン，ポストモダン的現代理論においては，観光者そのものが曖昧になっていることから，対象地域に訪れる多様な「来訪者」の滞在経験に着目して「場所」を問い直す必要があると考えられる．

そこで本研究では，東京都・檜原村の人里集落に位置する「東京ひのはら村ゲストハウスへんぼり堂（以下，へんぼり堂）」をめぐる人々を考察対象として，農山村地域に対する「場所」の問い直しを試みる．ゲストハウスは，1990年代以降，日本において急増しており，さまざまな主体が関わる交流空間として注目を集めている．このような「交流」と表象される場において，実際の来訪者の滞在経験を質的に追究し，来訪者が繰り返し訪れるその「場所」の特性を明らかにすることが本研究の目的である．

2．研究の方法と手続き

本研究では，現象学的地理，ないしは人文主義的地理の視点に基づき，主体にとって意味のある空間としての「場所」について考察した．具体的な研究方法としては，文献やWEBデータに基づく資料調査，2015年から2016年にかけての現地調査，「場所」についての質的考察を目的とした，来訪者や集落住民に対する半構造型のインタビュー調査を行った．

3．研究の概要

第1章では，研究の背景，目的と研究方法，研究対象事例の選定理由と立地地域の概要について述べた．

第2章では，へんぼり堂が位置する人里集落について，環境や年中行事，諸活動を整理し，それらをふまえて集落住民自身が捉える「場所」について考察した．

環境としては，主要な寺社や施設，産業などにつ

いて確認した．年中行事としては，春秋の例祭や夏の盆踊りがあげられ，諸活動については，有志の住民が主体的に開催している活動が数多く存在することが確認された．これらの行事や活動における準備や片付け，屋台の出店は住民自ら行っており，住民の自主的かつ活発な様子が明らかとなった．

住民が捉える「場所」については，4名の集落住民へのインタビュー調査に基づき考察を行った．分析項目は，環境に対する認識，活動に対する認識，また，人々に対する認識の大きく3つに分けられる．考察結果として，住民が捉える「場所」の特性は、周囲との関係性をもちながら，主体的に行動しなければならないものであることが確認された．これらの特性は，育林や草刈り，村内で商業を営むなど，農山村地域の暮らしに起因すると考察された．

第3章では，へんぼり堂について，その概要と開業前後における人々の営みを整理した．へんぼり堂は，茅ヶ崎市出身の30代男性が，2014年に空き家を改修して開業している．改修にあたってはSNSを通して呼びかけた有志延べ300人以上が作業に関わった．

開業以前に関しては，開業の経緯と住民の認識，また改修当時の様子について，開業者と住民へのインタビュー調査をもとに整理した．そのなかで，多くの住民がその実態について認識していなかった一方，開業に対しては寛容な態度であったことが確認された．また，住民自ら改修作業を手伝い，これらの作業を通じて，来訪者と親密な関係を築いていたことが明らかとなった．

開業以後に関しては，実際の来訪者について，平日の宿泊客と，週末の体験イベント参加者，集落行事への参加者の様子を現地調査に基づき整理した．なかでも，集落行事への参加に際して，来訪者は住民同様に行事の準備や片付け，屋台を手伝い，演目の一部を担当するなど，主体的に行事の役割を担っていた．このことから，来訪者と集落住民の相互的な関わりが明らかとなった．

第4章では，来訪者が捉える「場所」について，繰り返し訪れる4人の来訪者へのインタビュー調査に基づき考察を行った．4名の来訪者の特徴について，「休日の過ごし方」，「これまでの旅行経験」，「ゲストハウスへの関心」より考察を行った結果，「人」との関わりのなかで得られる経験に価値を置いていながらも，必ずしも交流を求めて来訪しているとはいえないことが考察された．

来訪者が捉える「場所」については，人里集落での滞在経験に焦点をあて，集落住民が捉える「場所」への分析項目と同様に考察を行った．その結果，来訪者は主に集落住民という「人々」に価値を置いており，その寛容さや親密さに焦点があてられていることが明らかとなった．具体的には，集落行事への参加を容認する住民の対応が寛容さとして述べられ，また，住民個々人に対して「会いに来る」，「世話になった」，「病院へのお見舞いや葬式に参列したい」という口述から，その親密さが読み取られた．さらに，このような関係性は，へんぼり堂改修当時より関わっている人々の影響とともに，滞在における経験を通した変化であることが確認された．

4．結論

へんぼり堂に訪れる来訪者と集落住民との相互的な関わりが，両者にとって意味のある空間として，新たな「場所」を創出させていると考察された．このような相互的な関わりは，来訪者と集落住民の平等な立場による「協働」によって創出されるものだと考えられる．「協働」の具体的な様子としては，へんぼり堂改修にあたり多くの人々がその作業に携わる様子や，集落行事の準備や片付け，屋台や演目への出演など，来訪者が主体的に集落における役割を担う姿から確認される．

また，これらが成立する要因としては，農山村地域における集落住民が持つ地域的背景と，人との関わりに価値を置く来訪者，両者の関係性が考察された．前者については，暮らしや商業のなかで培われてきた住民の「協働」の基盤があげられ，後者についてはそこに価値を見いだし，親密な関係性を築きながら自ら「協働」を実践する来訪者の姿勢があげられる．

以上，本研究では，来訪者の滞在経験を質的に追究することを通して，その「場所」の特性を明らかにした．本研究における意義は，これまで言及されてきた農山村地域における「場所」を来訪者の滞在経験から捉え直し，それらが多様な来訪者と集落住民の「協働」によって新たに創出されうることを証明した点にあると考える．■